

VOL.4
2007.10

宮城学院女子大学

MG発——コミュニケーション情報誌“パルティール”

「Partir (パルティール)」はフランス語で“出発する”——
——新しい時代に飛びたとうとする女性たちを支援、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

巻頭対談

アジアの子どもたちに 愛と信念を持って伝えたい

詩人・ファンタジー作家 星乃ミナさん × 宮城学院女子大学学長 吉崎泰博

シリーズ 思索の森の案内人たち

OG INTERVIEW 社会で活躍する卒業生たち

在学生の活躍を紹介! Students' Voice

MGの挑戦

MG Information

巻頭対談

詩人・ファンタジー作家 星乃ミネナさん × 宮城学院女子大学学長 吉崎泰博

アジアの子どもたちに 愛と信念を持って伝えたい

今回の学長対談は、宇宙や地球、生きるものすべてへの愛と夢を詠う詩人・ファンタジー作家の星乃ミネナさん。

宮城学院の卒業生でもある星乃さんは、多忙な創作活動の間を縫って、ボランティアでアジア各国の子どもたちのための国際的な「コンサート」を行っています。信念を持ち、世界を舞台に精力的に活躍しながら、しなやかさを失わない星乃さんは、高学生のためさす女性像にも重なります。学生時代のこの、国際交流について伺いました。

吉崎学長 新しい詩集「優しさのかけら」の地球に生きて「踏青社」の出版おめでとうございます。この詩集で7冊目になるそうですね。

星乃さん なかなかこれだと思っものが出来なくて、2年かかってようやく出来上がりしました。表紙の女神など本の中の彫刻は、仙台市出身の彫刻家・曾根絵里子さん、その彫刻をいろいろな場所で写真を撮ってくれたのが佐藤ゆりかさん。本当に素敵な方々と一緒に仕事ができて嬉しくて、おかげで売り切れたところもあるんですよ。

吉崎学長 「うきうき うきうき うきうき」がどんなに悲しく 苦しんでも「生きろ」という力強いメッセージにひかれました。こういう思いは、星乃さんの詩すべてに共通しているように感じます。

星乃さん 今、世の中にたくさん悲しいニュースがあります。私とはにか「生命の大切さ」を届けたいと思って、体の中から湧き出てきた言葉なんです。

吉崎学長 語るべき自分の言葉を持つ人を育てたいと思います(吉崎学長)

子どもたちのために この地球をひとつに

吉崎学長 星乃さんは、仲間たちと一緒にボランティアで「アジア少年少女・愛と夢のコンサート」を開催されているんですね。



星乃さん 最初は、1997年に中国、台湾、香港の子どもたちを招いて仙台で行いました。それからスリランカ「コンボ(同年)、中国大連(1999年)、モンゴル・ウランバートル(2004年)で開催しました。

吉崎学長 国際交流では、伝えたい思いをきちんと持っていることが必要だと思います。

星乃さん 私はただ、純粋に未来を担う子どもたちを通じて、地球がひとつになることを願っています。

てるとは、本学の教育の基本でもあるんです。星乃さんにとって、宮城学院で学んだということは何の意味を持っていますか？

星乃さん 中学、高校、短大と通いましたが、私が詩人になれたのは、ここで学んだ時代があったからこそだと思います。ボランティア精神が培われたのもそう。私は本当に姫育

詩人・ファンタジー作家 星乃ミネナさん



この地球を生きる すべての人へ

いきで いきて いきて
いまが となりに
悲しく 苦しむせ
生きて

心が 傷ついても
体が 病んでも
孤独でも
負けないで
この瞬間を 生きて

あなたは まだ
じぶんの 素晴らしさを 気づいていません
愛する心が まいどになった ままです
あなたは この地球にいて
わたしたちについて
わががえのない 宝です

あなたが 生きてるだけで
この地球は
幸せを ひとつ 持つていけるようになります
みんな 生きるのが 辛く悲しくても
でも 心の目を さませば
優しいの かけらは
街じゅうに あふれています

あなたの すべてを うけとめられる
優しい人 たくさん
めぐり逢えます
ともに生きる ことが
あなた

生きて いきて いきて
いまが となりに
悲しく 苦しむせ
じぶんを 超えへ 強く 生きて

「優しさのかけら」この地球に生きて

宮城学院女子大学 吉崎泰博 学長



宮学では「国際的な視野と、自分の信念を持ち、行動する学生」を育てたいと思っています。ただ教育の現場で、難しいと感じることも……。

星乃さん でも私はこの宮学で得たものと思っっています。学生時代、ボランティアという言葉のなかった時代でしたが、友人たち「いつか世界の子どもたちのために何かをしてみよう」と語り合っっていました。

PROFILE

宮城学院女子大学 学長
吉崎 泰博

1943年生まれ。九州大学文学部卒業。メリーランド大学で博士号取得。2002年北九州市立大学学長、2005年4月より本学学長就任。



PROFILE

詩人・ファンタジー作家
星乃ミミナさん

『宇宙の愛 地球の夢』(踏靑社)「花かんむり」(教育出版センター)など著書、CDの出版も多数。詩「ひとつの地球」は小学校の教科書にも掲載されている。音楽プロデューサーの牛山剛氏や画家の葉祥明氏らとともに、「アジア少年少女・愛と夢のコンサート」を開催。これまで日本(仙台)、中国、スリランカ、モンゴルで開催している。



私当時は本当に弱虫だったの。バドミントンの試合で相手に打ち返すことができないくらい(笑)。

吉崎学長 それが、どうしてそんなに強くなられたんですか？

星乃さん 礼拝で、「あなたの隣の人を助けなさい」って教わりました。友達が困っていたら助ける。学生時代はそれをみんなが私にしてくれた。そして「生命は天が決めること」という言葉も、大人になってから何度も思い返しています。

あるんです。私の周りではいろいろな不思議なことが起こりますが、私たちは宇宙に生かされていると感じます。

吉崎学長 科学万能主義のこれまでの社会では、そつじつた考えは排除されることが多かったでしょ。私たちを取り囲んでいる宇宙に感謝する気持は、自然と生まれてくるものだと思いますが……。つい宇宙交流の話になってしまいました(笑)。国際交流の話伺いたかったです。

星乃さん 私は何か大きなことをしようという考えがあってアジアでやってきたわけではないんです。愛や希望で地球がひとつになれたらいい、自分のとなりの人と友達になりたいという思いです。

日本や外国で異文化、企業などをお願いして「コンサート」の協力を得てきましたが、どこ

吉崎学長 いくら大きなことをいっていても、自分の近くの人を助けられないようでは…ということですね。

星乃さん スリランカには中学・大学時代の友人が住んでいて、彼女の長年の夢だった幼稚園を建てることになったというので、紛争の続くスリランカの平和のためにも、彼女を応援する意味でも危険だけどもコンサートをしよつということになりました。大連は大連の理工大学の客員教授をしている友人が、大学の創立記念のお祝いにコンサートをしてくれないかというので行きました。停電など、さまざまな問題にぶつかりましたが、中学時代から私をいろいろ助けてくれていた友人が大連に住んでいて、彼女が手伝ってくれました。

私は、夢は叶うもの信じているのですが、周りの人たちとの深い愛情に支えられてやることができたと感じています。

私たちは宇宙に生かされているその大きな存在に感謝したい

吉崎学長 星乃さんは、詩の中で宇宙を「そら」「地球を「ほし」と呼んでいますね。そして「コンサート」などは、「宇宙に感謝します」というメッセージを伝えていきます。

星乃さん 「天の神さま」というけど、天すな

も属さない個人のネットワークでやってきたことが良かったんです。世界的な音楽家の人たちがボランティアで出演してくれたり、各国の大統領や大使が応援してくれたりするの、そつじつひとりひとりの人間の思いが伝わったからだと思います。

現地で活動するには、まずは自分たちを信じてもらわなくちゃいけないですね。信念を持って、心のままを伝えれば、きこつたわかってもらえると思います。

あとはその国の文化を大切にすること。私たちのコンサートでは、その国の歌を子ども合唱団に歌ってもらいました。日本を伝えることも大切だけど、あなたの国の文化もぜひいっしょに伝えていきたいと思います。

お互いの文化、社会を本当に理解し合うには、相手のことを考えて深く付き合っていくかな

わち宇宙って、私たちにはまだまだわからない大きな存在ですよ。宇宙に地球と同じような生命がないなんていえないと思うの。私はたまたま地球に生まれたけれど、宇宙がなければ、自分はいないと思うんです。

吉崎学長 ここ数年の間に、アメリカの人工衛星によるデータを解析した、宇宙の新しい科学的事実が発表されています。すべての銀河系の物質は宇宙の全質量の4%にすぎないそうですね。私たちが知っている宇宙は、たったそれだけだということに驚きました。

あと72%は、不明のダークエネルギーで、24%はダークマターと呼ばれる何か……。宇宙の96%について、我々は全く知らないわけです。星乃さん そうですね。説明されていないことのほうが多い。スリランカのコンサートをきっかけに知人になった世界的なSF作家のアーサー・C・クラークさんが、宇宙の研究をしています。彼とそんな話もしましたが、私も詩を作るとき、自分の内側からではない、どこから降りてきたものを書くという体験が



いとわからないのです。

モンゴルの留学生を家に泊めるなどの交流をしていますが、彼らは国のため、家族のために勉強している。国の事情がありますが、日本の学生と意識が違いますね。個人レベルで付き合つて見えてくることが多い。

国際交流やボランティアは大変なこと多いけれど、私が体験を講演で話すと、みんな「あの人ができるなら私もできるんじゃないか」と思ってもらえるみたい(笑)。

吉崎学長 星乃さんのお話を伺って、学問でも音楽でも真剣に取り組む、自分の視野を広げれば、さらに意識は地球や宇宙まで広がって、感謝の心が生まれる——と感じさせられました。今後の活躍も期待しています。

思索の森林の案内人たち

「学問する」ということは、新しい知識の世界を開く喜びに満ちています。学ぶことは、きっとこれからの人生に輝きを与えてくれるはず。そんな世界を案内してくれる先生方に、「学びの姿勢」についてお話を伺いました。

文学作品との出会いと対話

ゴシック文学とその魅力

学生の時にナサニエル・ホーソーン作品に出会って以来、アメリカのゴシック文学にひかれ、特に19世紀中ごろの「アメリカン・ルネッサンス」と、20世紀中ごろの「南部ゴシック」といわれる作家を中心に研究を続けています。「ゴシック文学は、18世紀後半〜19世紀初めにイギリスなどヨーロッパで流行した、怪奇・幻想文学。たとえば、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』

などのようなフィーマイル・ゴシック(女性が女性の問題を書いた作品)は、生殖と死の物語の中に抑圧された女性の心理が描かれている作品として、新たな評価がされている分野です。アメリカでは19世紀初めころから、恐怖や幻想といったゴシック的要素を含む作品が書かれるようになりまし。主要作家の作品の中にもその要素が見られるのがアメリカの特徴です。魔女狩りや奴隷制度などといった史実をもとに、抑圧から生じる狂気や幻覚を描いたものもあり、自由と平等、幸福の追求という理想を掲げて突き進んできたアメリカ社会の闇の部分が見えてきます。

娯楽性が高く楽しく読めるものが多いのですが、「ゴシック的手法を用いて書かれたその作品の本当の意図は何なのか。当時の文化、社会といった時代背景を考慮しながらそれを探るのも興味深く、文学作品も時代を理解する資料であるといえます。かつて教科書で習った歴史は勝者の歴史でしたが、物語を通してその歴史の裏側を知ることができるのも魅力のひとつです。

英米文学

英文学科
両角千江子 教授



作品と向き合い自分を見つめる

研究対象として興味は尽きないのですが、教室では、主観を大事にして自由に、「作品と対話すること」を強調。2年生には、短編に日本語訳や解説を付けて教材にしたり、英語学習用にリライトされた本を使うなどして、「ゴシックの世界に触れることから始めていきます。3年次で原書を読みますが、19世紀の英語はなかなか難しいようです。ビデオなどを活用し、時代背景をイメージしてもらいながら読み進めています。深く読み込んだうえで、また最後に作品と対話する。作品を通して自分や自分と社会の関係などを見つめて欲しいと思っています。

「ゴシック小説を読み、「今まで自分が考えていた善悪の観念が崩れる感じがした」という感想を書いてくれた4年生がいましたが、今までの価値観を揺らす作品との出会いは、一つの自己発見。光が当たる部分だけを見て終わり、ではなく、物事には多面性があることを読み取って欲しいと思います。

昆虫学

一般教育科
田中一裕 教授

物事へのアプローチ 深く、幾重にも

小さな成功体験を積み重ねる

自然科学研究のおもしろさってこういうのは、なぜだろうという気付きがはじめるにあたって、自分なりの仮説を立て、あれこれ工夫しながら実験して、謎を解く、その過程にあると思います。まあ、うまくいかなかったらめいりなのだけれど、結果が出ない間は苦しいです。でも苦しいからこそ、謎が解けたときの喜びは何物にも代えがたい。この快感のために研究を続けて、とも言えますね。

研究は、一見関係ない分野と合わせてみて結果が出たときのほうが格段におもしろい。最近、タマネギバエが早朝に土の中からいつせいに羽化するのにはなぜかを探っています。特に土中のいろいろな深さにいる蛹がどうやって朝を知るのかという問題。朝になると土の温度が上がるのはわかるが、その時刻(夜明け)は土深が深くなるほど遅くなるはず。と。

土深に伴う夜明けの遅れをどうやって補正しているのか? 試行錯誤する中で、ふと、教員免許を取るために仕方なく受けた農業気象学の講義を思い出しました。あれは学部3年だったと思います。その講義の中で「土の深さ(と

ろでは、一日の温度の振幅が小さい」という説明があったんですね。そして、なんとできました。ハエ(となぎ)は土中で一日の温度較差を測ることで自分のいる深さを知っているのではないかと、だから土深に伴う夜明けの遅れを補正できるのではないかと気付いたんです。さっそく実験して、この仮説が正しい事を確認しました。2年かかりましたね。そこに到達するまで。これまで誰も考えていない事を実証できたときはうれしかったですよ。日曜も大学に来て実験し続けたか良かったです。

昆虫の眼を持って問題を捉えてみる

講義では自然科学的な考え方を伝えたいと思っています。1年生は特に勉強イコール暗記と思い込んでいる。まずはこれを変えたい。大学が高校と違うのは、何が問題なのか、問題を解決するにはどうすればいいかを、手持ちの情報で考え、自分で判断する力を養成すること。問題に気付く力、仮説を立てる力、はこれまでどれだけいろいろなことを経験・体験してきたか、どれだけ考えてきたかが勝負。また、ものごとにはいい面と悪い面が必ずあるのだから

で複数の目を持つると良いですね。昆虫の複眼みたいに(笑)。

私が主に担当している「一般教育」というのは、専門や資格のための勉強と違って、すべて何かに役立つと結果が出るものではないんです。でも、将来何が役に立つのかは誰にもわからないから、学生時代は幅広く勉強しても損はないと思う。僕は今でも、あの農業気象学の講義をちゃんと聴いて良かった、と思っていますよ(笑)。



「本の読みかた」——へて読書について



● 両角先生おすすめの本 ●



「動物農場」

ジョージ・オーウェル 著 高島文夫 訳
角川文庫(角川書店) 500円

人間の圧制に苦しんだ動物たちが反乱を起こし、民主的農場経営を夢見るが、豚による独裁体制へと転落していく。旧ソ連スターリンの独裁体制を暗に批判したユーモアと皮肉たっぷりの風刺・寓話小説。

● 田中先生おすすめの本 ●



「ヤナギランの花咲く野辺で」

ペランド・ハインリッヒ 著 遊田政隆 訳
どうぶつ社 2100円

当代随一のナチュラリストである著者の自伝的要素を含んだ自然観察の記録集。小さな虫たちの暮らしがいかにも興味深いかを、粘り強い観察と些細な事実の積み重ねから教えてくれる。今すぐ自然観察を始めたい一冊。

社会で活躍する卒業生たち

OG INTERVIEW

子どもたちの顔が輝く瞬間
苦勞なんて吹き飛ばしちゃいます

聖愛幼稚園
主任教諭

野崎 友子さん



— 幼稚園教諭という仕事の魅力は？

保育士だった母の影響もあって、子どものころから幼稚園の先生になるのが夢でした。実際に先生という立場になって感じたことは、子どもは私自身の経験から出た言葉や本音に一番敏感に反応するところ。人間としての経験や考えの深さが問われる気がします。本気で子どもたちと向き合っ中で、自分という人間も見えてくる仕事だと実感する毎日です。

— 今春、主任として赴任されたとのことですが…。

主任は、現場の意見を取りまとめる役目。自分の担当するクラスだけでなく、ほかのクラスの子ども問題や先生方の悩みなど園全体のことを目配りしていかなければなりません。大変ですが、苦勞があるから喜びがあるんですね。子どものイキイキとした笑顔が何よりうれしいです。

— 宮城学院で学んだ4年間を振り返ると…。

宮学は保育士と幼稚園教諭の2つの資格が取れるのが魅力でしたが、幼児教育についてじっくり学べたのが良かったと思います。知識や技術だけでなく、本当の意味で一人ひとりの子どもを理解する大切さを学びました。具体的に保育の計画を立てる授業の中で、子どもの気持ち、教育のねらい、教師の役割等を多面的に学習したことは、教師となった今でも、私の基本となることです。

— 宮学生へのアドバイスをお願いします。

自分の反省も含めていろいろ、学生時代はボランティアなどに積極的に参加して、ぜひいろいろな人と接しておくべき！ 相手の考えや状況、その背景を想像し、理解することによって自分の考えを深めていけると思います。

野崎 友子さん 2004年 発達臨床学科卒

仙台市内の私立幼稚園に3年間勤務の後、2007年4月から現在の聖愛幼稚園主任教諭。「休日は、森や山など自然の緑に囲まれてリフレッシュ…と言いたいところですが、なかなか行けないのが悩み」

Students Voice

～在学生の活躍を紹介！～

想像する・行動する・あきらめない

—— エコ&エネルギーワークショップに参加 ——

東北電力が主催する「エコ&エネルギーワークショップ」に参加しました。大学生主体の取材チームと演劇チームがあり、取材チームの調査をもとに台本が作られました。私は演劇チームとして参加しました。

今回の演劇は「不思議の国のアリス」をモチーフに作られています。その中で私はアリスの役を演じました。観客に問題を考えさせようというので、テーマに対する親しみや共感を引き出す役割です。

活動の中で得た知識や体験はとても興味深く、新鮮な驚きを常に抱きながら演じることができました。一番感動したのは、イベントに掛ける学生達の思いと行動力です。取材チームも演劇チームもひとつのことを伝えるために、一丸となって行動しました。何かをきっかけに想像し、それに対する行動を起こし、障害があっても諦めずにやり続ける。一人ひとりの微力な行動が、ついには一つの方向性を持ったとき、私たちの思いも皆に伝わるメッセージとして結実したのではないのでしょうか。



M.S.さん
日本文学学科3年
東北高等学校出身

東北電力が主催する「エコ&エネルギーワークショップ」に演劇チームとして参加しました。

陸上部の復活！

—— 8年ぶりに活動再開 ——

宮城学院女子大学の陸上部は、部員の減少により8年間活動を休止していましたが、私たち1年生が入部したことをきっかけに、陸上を経験したことのある人あるいは経験はないけれど陸上が大好きな人が集まって、8年ぶりに陸上部の活動を再開することになりました。

6月23日、24日に、東北地区大学総合体育大会が開催され、大学でのデビュー戦として、新生陸上部のメンバーが出場しました。大学受験の間のプランクが原因なのか、思うような結果は出せませんでした。久しぶりに競技に出場することで、中学時代に400メートルリレーで出場した全国大会や、高校時代に個人種目で出場した県大会（決勝大会）での思いがよみがえってきました。

大学生活は始まったばかりで、勉強や実習など、がんばらなければならないことはたくさんありますが、陸上部での活動も私の大学生活の中で大切にしていきたいことのひとつです。

復活した新生陸上部。大会での好成績をめざして、新たな出会った仲間とともに日々の練習を積み上げていきたいと思っています。



M.C.さん
児童教育学科1年
仙台高等学校出身

宮城学院女子大学の陸上部は8年ぶりに活動を再開することになり、東北地区大学総合体育大会に新生陸上部員として出場しました。

学生食堂のリノヴェーション

—— 学食をよりよい空間に ——

学生食堂の耐震工事に伴い、生活文化学科で食堂の改善案を考えよこと発足したが「食堂プロジェクト」。主に建築系の研究室に所属する3・4年生と2年生の有志も参加して、建築専門の先生方のアドバイスをもらいながら約1カ月プロジェクトを進めてきました。そのリーダーに私が選ばれました。

まずは現状の問題点を考えました。他大学の食堂も調査・比較することで、さまざまな問題点が見えてきました。そこから座席のレイアウトや動線、テーブルの配置など、改善案を出し合い、「より快適な空間にしたい」という思いを模型に表現しました。

学生が参加して「大学を変える」という大きなプロジェクト。最初は今回のようなインテリアまで作る模型の経験が浅かったため、作業の分担方法など難しい面がありました。しかし、ほぼ毎日作業を行い、模型が完成に近づくと、みんなの完成への期待が高まってきました。

学生自身、大学に対してさまざまな意見、要望を持っていると思います。そういった中で、こうして学生部の先生方にプレゼンテーションできたことは、とても貴重な経験であったと感じています。このプロジェクトが、より学生の意見が反映される大学作りへの一歩となればと思っています。



C.T.さん
生活文化学科4年
宮城県宮城野高等学校出身

学生食堂の耐震工事に伴い、生活文化学科で食堂の改善案を考えよこと発足した「食堂プロジェクト」のリーダーに選ばれました。

「地域社会と手を携えて」



音楽を身近に欲しい、日常の中で聴きたいという人の願いは、今やたやすくかなえられるようになりました。その音楽をライブで聴くことができるなら、そこにはヘッドホンステレオや携帯音楽プレーヤーで聴くのと違って、演奏者と聴き手がともに作る世界が音楽の楽しみを高めてくれるでしょう。音楽科の社会貢献はここにその一つがあります。

2005年、石巻市遊楽館に同地区として初めてパイプオルガンが

設置され、それを機に音楽ソフト面での協力が音楽科に要請されました。パイプオルガン演奏者の派遣から始め、2006年からは、音楽科と遊楽館の連携事業として、宮城学院女子大学音楽科の贈る「こもればの降る丘音楽会」を開催しています。また、この7月には長命ヶ丘市民センターでも七夕の夕べで地域の人々に音楽をお届けしました。

社会が人々の身近な場に音楽を求め、音楽家がそれに応えていく関係が広がりつつあります。音楽科のソフトパワーが地域社会に還元され、地域の人々に楽しんでもらうアウトリーチ活動は、学生が音楽演奏家の役割を理解する機会にもなり、勉学への動機付けも高まります。そして、こうした場と機会こそ音楽科の学生が将来も音楽活動をつづける主要な場となるでしょう。



— おすすめの本 —

■地球の食卓 (TOTO出版)

ピーター・メンツェル＋フェイス・ダルージオ著

■コンビニ弁当16万キロの旅 (太郎次郎社エディタス)

千葉保 (監修)
コンビニ弁当探偵団 (文)
高橋由為子 (絵)

先生のおすすめはどちらでもとても読みやすく興味深い内容でした。「地球の食卓」を見た、バック詰めが多さには私たち学生も驚きました。

とても優しい大山先生のご協力ありがとうございました。

「コンビニ弁当16万キロの旅」(太郎次郎社エディタス)という概念から、輸入食品の多さや輸入するためにかかる輸送費などを含めて、食の問題を身近に考えることのできる一冊です。

——「コンビニ弁当16万キロの旅」——

(太郎次郎社エディタス)

この本をみてみると、世界情勢や社会・人間関係・環境問題など、いま問題となっているさまざまなことを考えさせられます。「食」はみんなの問題であり、無関心な人はいても無関係な人はありません。むしろ世代や国を超えて盛り上がることのできる話題の一つだと思えます。この本が世界を考えるきっかけになってくれればと思います。

——「地球の食卓」(TOTO出版)——
今回は食品栄養学科の大山珠美先生にインタビューしました。先生おすすめの「本や「食」について思っていることや、そのことをお聞きしました。

先生に聞きました

● 私のおすすめ ●



食品栄養学科 大山 珠美 先生

MG news

宮学ニユース

宮城学院女子大学企画のイベントを紹介します

MGオリジナル「あつたか新歓」

2007年5月8日、恒例の新生歓迎会が開催され、新入生、在学生、そして教職員がスポーツで競い合い、互いに交流を深めることができました。

みんなで汗を流したその後は、食品栄養学科・照井ゼミによる「匠の豚汁」に、児童教育学科・郷司先生特製「Let's go snicaler」。また、遊歩道を歩いてキャンパスの豊かな自然に出会おうというプログラム企画では、焼きそばとすいとんがふるまわれました。



さらに今年は「学長・愛情、トチモチプロジェクト」が始動！古崎学長先生自ら拾い集めた桜ヶ丘キャンパスのトチの実。その皮むき、あく抜き、トチモチ作りには学生有志が全面協力。学長と学生、初のコラボ企画です。

ここでもありそこでもここにもない、MGオリジナル新生歓迎会。五月晴れの一日。この日もポカポカの一日となりました。

美術館でボランティア

宮城県美術館で開催された「めぐりとなかまたちー山脇巨白子絵本原画展」(4月14日～6月3日)で、宮城学院の学芸員課程の学生がボランティアとして活躍しました。

展示会の3か月前から博物館実習の受講生を中心にボランティア「めぐりとなかまたち」が組織され、4つの関連事業のサポート、展示室内の案内誘導の仕事を受け持ちました。

大好評だったのは、めぐりとなかまたちの服と帽子を身に付けられる「めぐりとなかまたち」のコーナーで、行列ができたほど。子どもより親たちの方が熱心になったり、着替えるのを嫌がっていた子どもが鏡に映った自分の姿を見てようやくうきうきする姿も見られました。



会期中、本学音楽科の学生、卒業生による絵本の朗読とオリジナル曲のミニコンサートも行われました。ボランティアたちはこれにも協力、学内の実習では得られない貴重な体験の連続となりました。

campus calendar キャンパスカレンダー

10月20日(土) 21日(日)	大学祭
10月27日(土)	大学院入学試験(第一回)
10月31日(水)	音楽科コンサート(大学講堂)
11月 2日(金) ～7日(水)	「宮城学院の120年」展(せんだいメディアテーク)
11月10日(土)	編入学・TOEIC編入学試験日・公募制推薦入学選考日・指定校推薦入学選考日、MG推薦入学選考日、特別入試(社会人・帰国子女)試験日
11月20日(火)	布田庸子先生メゾ・ソプラノリサイタル(退任記念)(太白区文化センター)
12月 8日(土)	オープンキャンパス in Winter
12月17日(月)	クリスマス礼拝
1月19日(土) 20日(日)	大学入試センター試験
2月 3日(日)	音楽科専門試験日 一般入試(A日程)
2月 4日(月)	音楽科専門試験日 一般入試(A日程) 大学入試センター試験利用入試(A日程)
2月 5日(火)	一般入試(A日程全学科)
2月23日(土)	こもれびの降る丘 音楽会 音楽科「声楽アンサンブル」によるコンサート(石巻市遊楽館)
2月23日(土)	大学院入学試験日(第二回)
2月26日(火)～ 3月 2日(日)	生活文化学科展-2007年度卒業論文・卒業設計展-(東北電力グリーンプラザアクアホール)
3月 7日(金)	一般入試(B日程)試験日、特別入試(外国人留学生・帰国子女)試験日、音楽科専門試験日(大学入試センター試験利用入試(B日程))
3月16日(日)	音楽科卒業演奏会/論文・制作発表会(太白区文化センター)
3月17日(月)	卒業礼拝、卒業パーティー
3月19日(水)	学位記授与式

サークル・学友会情報

よさこい部

私たちよさこい部は、とても元気で明るいサークルです。今年は1年生が24人も入部し、活気に溢れています。

私たちは北は北海道から、南は高知まで、全国各地で行われるよさこい祭りに参加しています。またお祭りに参加するだけでなく、老人施設でのボランティアや近隣のイベントにも参加しています。YOSAIに恋しているかわいい乙女たちをこれからもよろしくお願ひします。



箏曲部

私たち箏曲部は、大学祭に向け箏(琴)や三絃(三味線)の練習をしています。外部からプロの先生方に来ていただいているので、初めてでも一から丁寧に教えてもらえます。箏は、弦の押し加減で全く音が変わってしまいます。最初の段階で難しいと感じる部員がほとんどでした。しかし、慣れてくるとだんだん奇麗な音を奏でることができます。そんなところが箏曲の魅力なのでしょう。みんな真剣に、楽しく練習をしています。



映画部

去る4月15日、せんだいメディアテークで行われた「在仙大学映画部合同上映会～ムービー・パーティー」に私たち映画部も3本の作品を出品しました。参加者はみな映画が大好きで、このイベントは映画好きの交流の場でもあります。上映されるのはいわゆる商業映画の対極にある自主制作映画です。学生が使える機材は家庭用のビデオカメラが一杯ですが、それでどれだけの作品が撮れるか、新鮮な発想と想像力を駆使して限界に挑戦するのも映画制作の醍醐味です。



水のある風景——丸田沢——

水を見ると、人は何気なしに落ち着くものようです。疲れたとき、心が痛んだとき、私も大学北側の丸田沢をよく眺めていたものです。最近、忙しすぎてそれすらする時間ありませんが、それでも「水のある風景」は、私の心の中で安らぎが感じられる心象として残っています。

今年の2月に、姉が住むオーストラリア、ニューサウスウェールズ州最大の内陸の都市、ワガワガを久しぶりに訪れました。小さな



旅客機で空から街に近づいて降下し始めると、街を取り囲む農場に点在する茶色くて巨大な「穴」が見えてくる……。農場で放牧する家畜の生命線となるはずの貯水池がすべて枯渇して、底をさらした単なる「穴」と化していました。

この地域はもともとオーストラリアの穀倉地帯の中心で、国内はおろか、世界中に小麦を供給する生産拠点でした。それが、この6年間まとまった雨が降っていません。

去年の小麦の収穫は、粒もありませんでした。オーストラリアの農業面積の70%を占めるこの地域に、山間部の雪解け水を内陸部に逆流させて、灌漑用水として供給する巨大なダムシステムも枯渇状態になってきています。姉の家に泊めてもらいましたが、蛇口から出る水の一滴も無駄にしない姉の節水生活には脱帽するしかありませんでした。

オーストラリアから来日して33年、水を何とも思わずに浪費する日本の生活に慣れた私にとつては、たいへんショックな経験でした。世界的な環境異変を体験して、深く考えさせられました。

水のある風景は、本当は「有り難い」ものなのです。しかし、日本人はそれをあたりまえのように思っていて、その有り難さがわかっていない。現在の国際社会にはさまざまな問題がありますが、何が怖いといって、本当に怖いのは地球温暖化ではないでしょうか。私たちは、この地球を救うために、水のある風景の有り難さを再認識する必要があります。そう、丸田沢がまだあるうちに。

編集後記

“新たな一歩”

『バルティール』第4号をお届けします。巻頭の学長対談はハートフル童話賞の審査員もされている詩人の星乃ミミナさん。当日はことのほか話が弾んで、誌面に収まりきらないくらいでした。宮城学院には星乃さんをはじめ、個性的でステキな卒業生がいっぱい。11月には創立120周年にちなみ、各界で活躍する120人の卒業生を特集して「宮城学院の120年」展を開催します(さんだいメディアテーク)。どうぞお楽しみに!(M・F)

大学広報委員会はこの春(2007年4月)メンバーが入れ替わり、新たな一歩を踏み出しました。編集部では誌面をよりよいものにするために、皆さまからのご意見ご感想をお待ちしております。メールアドレス partir@mgu.ac.jpまでお寄せください。